

第2章 人類の進化の歴史

約6500万年前に恐竜などの大型爬虫類が絶滅したあと、鳥類や哺乳類が発展してきました。哺乳類の一部である霊長類は、新しく進化した被子植物の森で樹上生活に適応しましたが、彼らは、約3000万年前には、高等霊長類段階にまで進化していました。

その後、約1500万年前以降に始まった寒冷化と乾燥化の影響で森が次第になくなってくると、高等霊長類の中でも、森の生活と縁が切れないものと地上生活に進出するものが分岐しました。そして、約900万年前から700万年前までの間と思われるものが、森と縁が切れなかった高等霊長類はゴリラの先祖やチンパンジーの先祖になり、直立して地上生活に踏み出していった高等霊長類が人類の先祖になったと考えられます。

本章では、人類が他の類人猿たちとは違う独自の進化を始めた頃から、現在私たちが属するホモ・サピエンスに至るまでの進化の歴史を、化石を中心にたどりまします。

前適応段階

人類の身体的特性で最も重要だと考えられているのが直立姿勢ですが、人類には直立以外にも重要な身体的特性があります。例えば、優れた脳、犬歯が退化していること、雑食性、手指が器用で道具を作り使うこと、言語を話すこと、体毛が退化し汗腺が発達していることなどです。これらの特性の中で、いくつものものは人類がまだサルのな段階から準備されていたという考えがあり、それを前適応 (pre-adaptation) と言います。

人類になる霊長類は、ある期間、樹木の太い枝や幹、樹木の根元、近辺の草叢などを、生活空間としていたと考えられます。そして、垂直な空間としての幹の部分は、単なる登り降りの通路ではなく、そこに留まって食物を手に入れる場所でもあったと考えましょう。そういう生活では、身体を立てていることが多くなって、体重支持がおもに下半身でなされるようになったでしょうし、食物も、葉や実、草の種子、茎や根などの植物性の食物の他、昆虫類、幹の樹皮の下の幼虫、鳥の卵や雛、まわりを這い回る小動物などの、動物性食物が含まれるようになって、雑食性になっていったでしょう。歯も、小型の食物を口に放り込んで臼歯で磨り潰すような咀嚼の仕方になって、犬歯が退化して短くなり、臼

人類の出現

出土した霊長類化石に直立の証拠があれば、その化石は人類であると判定されます。そういう基準で見ると、最も古いヒト化石は、サハラ砂漠の南部、チャドで出たサヘラント

特徴が導き出されるのです。以上述べたように、人類になる前の生活空間を、樹木の太い枝や幹、根元、近辺の草叢あたりに設定すると、後肢による体支持、雑食性と犬歯の退化、放物線状の歯列、広い口腔と器用な舌、手指による器用な作業能力、大脳皮質連合野の発達など、人類の重要な諸

特徴が導き出されるのです。以上述べたように、人類になる前の生活空間を、樹木の太い枝や幹、根元、近辺の草叢あたりに設定すると、後肢による体支持、雑食性と犬歯の退化、放物線状の歯列、広い口腔と器用な舌、手指による器用な作業能力、大脳皮質連合野の発達など、人類の重要な諸

特徴が導き出されるのです。以上述べたように、人類になる前の生活空間を、樹木の太い枝や幹、根元、近辺の草叢あたりに設定すると、後肢による体支持、雑食性と犬歯の退化、放物線状の歯列、広い口腔と器用な舌、手指による器用な作業能力、大脳皮質連合野の発達など、人類の重要な諸

特徴が導き出されるのです。以上述べたように、人類になる前の生活空間を、樹木の太い枝や幹、根元、近辺の草叢あたりに設定すると、後肢による体支持、雑食性と犬歯の退化、放物線状の歯列、広い口腔と器用な舌、手指による器用な作業能力、大脳皮質連合野の発達など、人類の重要な諸

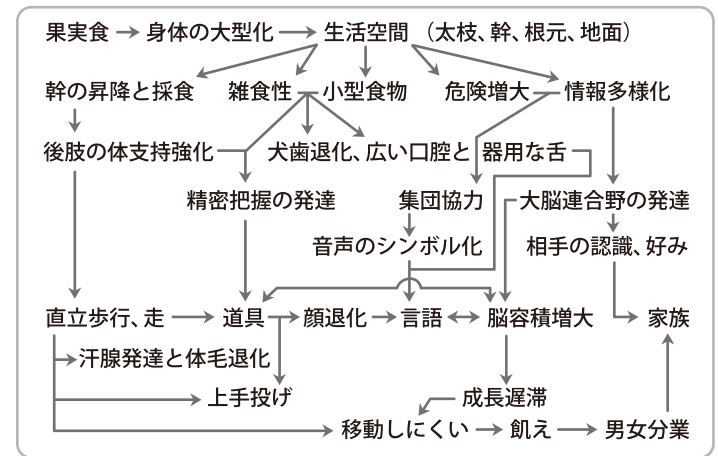
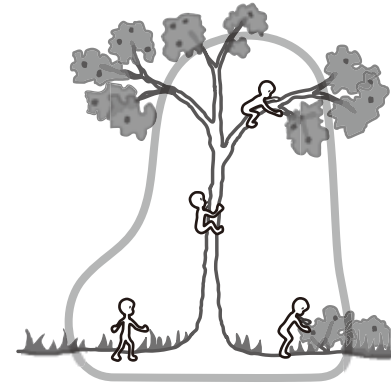


図2・1 人類への過程（富田他『生理人類学』朝倉書店、1999より）人類の祖先である高等霊長類は、森の樹冠部ではなく、樹木の幹、太枝、樹木の根元あたりの地面を生活空間にしていたと考えられます（上図の線で囲んだ範囲）。このような段階を経た人類の祖先には、たくさんの人類的な特徴が形成されたと考えられます（下図）。